

# 思潮

opinion

論壇誌 1月

今月の論壇誌は、「新しい資本主義」や持続可能性の確保に関する論考が活況だった。その中で取り残された人への配慮や、新しい社会制度への警戒も出ている。(文化部 前田啓介)

これからの社会は、経済成長だけではなく、人の幸福や環境の豊かさを両立させるかというところに主眼が置かれようとしている。首相の岸田文雄氏が「新しい資本主義の内容を」私が目指す「新しい資本主義」のブランドデザイン(『文芸春秋』)として明らかにした。「世界の課題となっている分断や格差を乗り越える資本主義をわが国で実現したい」と宣言。強調するのは「モノから人へ」、人的資本を大切に社会の実現だ。「優れた人材が生み出すイノベーションによって社会の課題を解決し、人への投資に見合った利益を実現することが、新しい資本主義を目指す成長と分配の好循環を実現する鍵です」と主張している。

岸田首相の論考も「成長戦略」重視を強調しているが、世の中の「脱成長」への傾斜に危惧を持った論者は多い。投資家の山本康正氏は「社会に貢献できる企業が生き残る時代」「(潮)で、環境や格差拡大の問題を脱成長」によって解決しようとする

## 資本主義は新しくなるか

るのではなく、「最新テクノロジーを駆使しながら資本主義をバージョンアップし、環境と経済成長の両立を目指すべき」と提言する。

また、経済学者の馬奈木俊介氏は「『持続可能性』と『経済成長』は両立できない」(『Voice』)で、経済成長について、GDPではない新たな指標として、国連が発表する「新国富指標」を提示する。教育など過去の人的資本の蓄積や自然資本を評価に入れる指標で、経済から環境、健康まで包括的に富を測れるとする。馬奈木氏は「世界では持続可能性へ向けて、人工資本による経済成長の指標に加え、自然資本や人的資本についての豊かさの指標を認知する動きが広がり、その重要性が注目されている」と論ずる。

「新しい資本主義」や「持続可能な社会の実現に、期待する論者は多い。その中で、取り残されるのではなく、「最新テクノロジーを駆使しながら資本主義をバージョンアップし、環境と経済成長の両立を目指すべき」と提言する。

また、経済学者の馬奈木俊介氏は「『持続可能性』と『経済成長』は両立できない」(『Voice』)で、経済成長について、GDPではない新たな指標として、国連が発表する「新国富指標」を提示する。教育など過去の人的資本の蓄積や自然資本を評価に入れる指標で、経済から環境、健康まで包括的に富を測れるとする。馬奈木氏は「世界では持続可能性へ向けて、人工資本による経済成長の指標に加え、自然資本や人的資本についての豊かさの指標を認知する動きが広がり、その重要性が注目されている」と論ずる。

## 「脱成長」や「格差」警戒と危惧

の先崎彰容氏は「人新世の『資本論』に異議あり」(『文芸春秋』)で批評家の吉本隆明を引用しつつ、「自分に熱狂し信じ過ぎることを警戒しつつ、一方で、他人と安易に連携し、同じ方向に滑走していく個人の弱さを戒めてもいる」と指摘する。そして、「なせ、理想世界に眼を輝かせ『信じる』のか」と投げかける。

今、世界は新しいステータジに移行しようとしているのかもしれない。ただ、先崎氏が言う「人間が人間に語りかける際、自己陶醉という魔物に呑み込まれる瞬間がある」と、それを凝視することには、忘れてはいけないだろう。

それでも、人や自然を大切に、よりよい社会を作る試みは続けられるべきだろう。その変化は目新しさや聞えのよいものではなく、言葉を超えた実直な方法で進めてもらいたい。

## 世界を覆う不確実性と混沌

- ①ジェイソン・ボードフ、メーガン・オサリバン「エネルギーの新地政学——エネルギー転換プロセスが引き起こす混乱」(『フォーリン・アフェアーズ・レポート』1月号)
- ②マイケル・キメージ、マイケル・コフマン「ロシアとウクライナの紛争リスク——キエフの親欧米路線とロシアの立場」(『フォーリン・アフェアーズ・レポート』1月号)
- ③石井妙子「愛子天皇への道」(『文芸春秋』2月号)

私の3編

中西寛  
京大教授・国際政治学



2022年の初めに世界を覆っているのは不確実性と混沌だ。先が見えない暗闇の中で生きることが今の世界の課題となっている。

①は2050年に温室効果ガスのネットゼロを実現する目標を前提に、エネルギー政策が国際政治に及ぼす影響を分析した論考。サプライチェーンの混乱と脱炭素化の見通しの中でエネルギーを巡る議論も錯綜しているが、本論文は国際エネルギー機関による分析を下敷きに、世界がネットゼロに向かう過程では様々な地政学的リスクが生じうることを指摘する。

②は国際的緊張の焦点となっているウクライナに関して、特に

## 素材の存在問い続けて



会場にはインスタレーションやレリーフ、ドローイングなどが並ぶ。手前の作品は「空止耕」

「もの派」美術家 菅木志雄さん

ほとんど手を加えずに素材を組み合わせた美術潮流「もの派」の美術家として知られる菅木志雄さんの半世紀以上の活動を振り返る「菅木志雄展 へもの」の存在と会場への永遠が、故郷・岩手県の大立美術館(盛岡市)で開かれている。制作年代順に見せる展示からは石や木、トタンといった身近な素材を組み合わせ、それが置かれた場所との関係性を考えさせる作品

## 岩手県立美術館で作品展

を発表してきた菅木さんの一貫した制作活動と問題意識がうかがえる。

1944年生まれ。もともと田んぼや川遊びながら「なせタニシはこの形をしているのだろうか」「この石はなぜここにのっているのか」といったことを考える少年だったという。その視線を自覚的に作品に取り入れたのは、60年代後半から。高度成長、公害、全共闘運動などで社会が激変した時代は「アートに対する意識も変わる気配がある」と菅木さん自身も話している。

を發表してきた菅木さんの一貫した制作活動と問題意識がうかがえる。

1944年生まれ。もともと田んぼや川遊びながら「なせタニシはこの形をしているのだろうか」「この石はなぜここにのっているのか」といったことを考える少年だったという。その視線を自覚的に作品に取り入れたのは、60年代後半から。高度成長、公害、全共闘運動などで社会が激変した時代は「アートに対する意識も変わる気配がある」と菅木さん自身も話している。

## 論壇 キーワード

### 【バイデン外交の1年】同盟国の困惑と不安

(オーガス)の創設は、フランスや欧州諸国の不信感を高めた。現在、ロシアがウクライナ国境に兵力を

加えて、国内でも中国への脅威が大きく取り上げられ、中国に対して甘い顔をしていると取られるような外交はできなくなっている。また、中国へのサプライチェーンの依存を減らし、国内の雇用を増やすための工場誘致も

あちらこちら 一方の立場、もう一方の立場、うまくいかなかったら、どうなるか。菅木さん自身も話している。動を通覧する数少ない機会となったという。「ほかをやらかさず、自分の考えた